

吉田松陰と横井小楠の実業教育について

職業能力開発総合大学校 名誉教授 大川 時 夫
職業能力開発総合大学校 堤 一 郎

Practical Education Realized by Yoshida-Shōin and Yokoi-Shōnan

Tokio OKAWA, Ichiro TUTUMI

summary

One of actual way to realize the world of Royal moral, which was really experienced by two philosophers Yoshida-Shōin and Yokoi-Shōnan in the end of Edo period. Their philosophy and studies are briefly discussed in the text. Confused states of society seen around our present daily life, that state should be called as the society of no-moral on the concept of Confucianism constructed by classical Chinese philosophers Shuki and Kōshi.

In order to recover the confused states into sound society of true moral, some revolutionary educational transformations are earnestly entreated on present educating systems in Japan. Such revolutionary education were actually practiced by two persons mentioned above. Yokoi said that means the study of actual reality, in other word, that is seen as training study of actual practical job performance, or shortly O.J.T.. One educational example was "Shōka-sonjuku" directed by Yoshida-Shōin and the other was "Mei-do-can" school directed by Yokoi-Shōnan at Fukui (feudal) clan, where educational fields of strict but humanistic education had been realized. Those real educational method should be considered so as just fit to reconstruction of true moral society.

1. はじめに

現下日本の社会状況を眺めると人間の道徳性・倫理性が地に堕ち、詐欺強盗殺人などが日々の新聞報道を賑わし、政府高官、司直検察当局までが汚職にまみれる、まさに正気の沙汰とは思えない状況に落ち込んでいる。そこで勢い教育者の責任が問われるが、人間教育は学校という制度だけが受け持つ物ではなく、家庭、地域社会、企業社会も応分に責任がある。その家庭は核家族化が進んで家族・親族というものが消滅しかけており、地域共同体社会も崩壊してしまった現実が諸処に見受けられる。農山村の共同体も農業基本法成立を境に崩壊が加速しているし、男女雇用均等法で家庭の主婦は経済的自立と活動の自由を求めて社会進出をはたし、男性共々サラリーマン・労働者化し、家庭料理がなくなり、ファーストフード（一膳飯屋）で三食を賄う風潮が蔓延している。伝統的な地域社会が失われる速度を加速しているのは自動車の洪水と無制限な営業の自由化による巨大資本のコマーシャリズム（商業宣伝）と流通革命での地域商店街の壊滅が原因であることは素人解りしやすい。貿易自由化の中で為替差益を求める通貨売買の自由化がもたらした外国製品の洪水的流入は、地域産業を押し潰すいわゆる空洞化現象をもたらすのであり、国家的産業政策が欠如しているために産業二重化の底辺層への救いの手は依然として現れていない。この様な状況下で社会的弱者を守るはずの保険や年金制度も崩壊の危機に瀕して、そ

れが又社会不安を増大させ、社会的非行を増加させる、悪い意味での循環が始まりかけている。単なる経済不況のデフレスパイラルではなく、人間モラル低下のスパイラルが出現しているのだ。

さて、この社会的不安を取り除くためには、法制化による強制的な治安維持策の出現可能性も予測できるが、人間の徳育による心の中からの自制を待つことが求められねばいけない。元来、徳育は宗教者の役割であったが、今日の伝統的宗教は庶民の心の支えには遠くなり、専ら仏事、法事の執行業のおもむきがある。その中で最後の頼みはやはり教育界となる訳だが、その教育界も知育偏重の悪癖からなかなか抜けきらず、人間性の救済にはほど遠い。

その改善策としてかねてより実学融合という教育方法が提案されて来たことは衆知の事実である。然し、すべての学問が直ちに現実の社会問題に直結した場を持つとは限らず、学問の場と実業の場を結合する事が完全に是であるとは主張し難いが、学問研究の成果を市民に語りかけ、理解を得るもので無くしては真の学問たり得ないことは間違いないことである。その実学融合教育の代表格はドイツ流二元教育であり、実務労働は企業現場などの実社会で行い、学校は品性や知識の講学だけに徹しようとする、学校と企業現場が結合した社会教育運動である。この方法で人間の道徳性を高めることは相当に期待できるのだが、不徹底な部分があり、ドイツには理想的社会が実現しているかと言えばそうでもない。二十世紀には第一次、第二次世界大戦がドイツから引き起こされているし、その面では日本と大差はないのである。此処では日本歴史の中で人間性の救済に教育的に挑戦した二人の哲人が示した真の実学教育の例を参考にして、人間性回復の世界を考究してみたいと思う。

2. 吉田松陰の示した実学融合教育とは^{1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8)}

吉田松陰の業績や人物については数多の解説書があるので、此処では簡単にあらましを記すことにしたい。松陰の略歴は以下の如くである。

1830（天保元）年、長門国萩松本村護国山麓、下級武士杉百合之介常道の次男として出生。

幼名は虎之助通称寅次郎、元服して矩方^{のりかた}。幼時叔父の玉本文之進に付き四書五経を学ぶ。

1835年、5歳の時、叔父吉田家の養子に出る、吉田家は山鹿流軍学者の家柄であった。

1838年、9歳にして家学見習いとして藩校明倫館へ上がる。10歳にして家学を講じる。

1842年、13歳にて武教全書を講じる。17歳で山田亦介（兵学）、飯田伊之介（西洋陣法）、守永弥左衛門（砲術）の伝授を受ける。1848年19歳で独立の兵学・儒学師範。

1850年、21歳で朱子学（中庸）を講ず。

1851年、22歳で山鹿流兵学免許皆伝を受ける。更に兵学研究のため江戸へ出る。安積良斎（儒学）、山鹿素水（兵法・儒学）、佐久間象山（思想家、兵学者、洋学、儒者）等に師事する。この年肥後藩士宮部鼎蔵と意気投合し脱藩して東北旅行する。日本の社会状況をつぶさに視察し経済社会の乱れ、国家内外の危機的状況を観ずるに至り悲憤慷慨する。

1852年、23歳で脱藩亡命の罪を断ぜられ、御家人召放しとなる。通称を松次郎と改名。

1853（癸丑、嘉永6）年、24歳で諸国遊歴の途に上がる。通称を寅次郎と改称。6月象山に洋学を学ぶ。

同月ペリー艦隊4隻浦賀に現れ幕府を威喝。10月横井小楠を訪問、議論する。

1854（安政元）年、ペリー艦隊再来。浦賀にて金子重輔と米艦にてアメリカへ出国しようとして果たせず、自首して江戸の牢獄へ投ぜられる。10月萩藩野山獄へ繋がる。

1855（安政2）年、獄中にて孟子を講ずる。藩政府、松陰^{註1)}を実家である杉百合之介に預ける。座

敷幽閉。

1857（安政4）年、幽閉中に弟子が集まり、11月松下村塾拡張成り、松陰これを主宰する。

1858（安政5）年、松下村塾繁盛。しきりと幕府政策を批判し幕府要人襲撃を企画、失敗、逮捕さる。

1859（安政6）年5月、下獄し東送の命令下り江戸伝馬町の牢へ繋がれる。10月27日処刑。

松陰は武家に生まれ、武士たるべき教養を身につけた軍略家であった。松陰が生まれた天保元年は幕府老中水野忠邦の改革で苛酷な政策がとられた。商業資本が拡大し農村マニュファクチュアが進展し経済活動が拡大、市民の生活が派手になり生産力を持たない武家階級の財政を圧迫、物価が上昇して庶民の暮らしは苦しくなった。時代に適合する経済運営が幕府にはできなくなり、幕府行政は制度的に行き詰まっていた。長州藩でも経済状況は逼迫して藩政は村田清風を代表とする改革派と商人資本と結託した坪井九衛門の保守派の対立が藩政を奪い合う状況であった。松陰の思想は四書五経の儒学を下地にしていたが、時勢に対して歴史観にもとづく祖国日本に対する愛国心のほとぼしる正義派であった。自ら学んだ藩校明倫館の学風を評し「科目の設は大いに教育に便なり以て国弊の習を破るに足る、然れども国史を以て幹となし凜然国体を立つるに非ずんば則ち吾望みなし」と日記に記している。彼は後輩に対する講義の中で「学者になってはいかぬ、人は実行が第一である、書物の如きは心がけさえすれば実務に服する間には自然に読み得るものなり」と述べた。単に学問を学んで悲憤慷慨するだけではいけない、断然改革の運動を成すべきと教え込んだ。それは、彼が幕府の禁制を犯して囚われの身になっている最中のことであった。

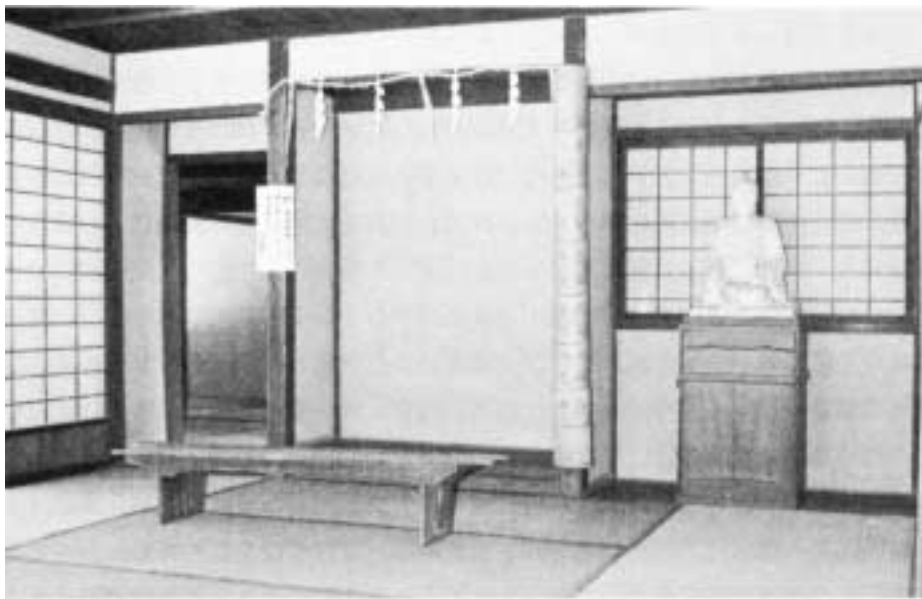


写真1 松下村塾の教場、柱に掛けた竹簡に座右の書、「自非読満巻書安得為千秋人、自非輕一己勞安得致兆民安」の彫物が掲げてある

注1) 管見では1852（嘉永5）年、11月の『史記抄出』の署名に雅号「松陰」の初出がある。

その他、矩方、寅二、藤寅、寅次郎、松次郎、大次郎、そして二十一回猛士など各種の署名が使われた。矩方は本名、寅次郎は通称の中でも多く使われている。因みに絶筆『留魂録』の署名は二十一回猛士。回向院の暮銘「松陰二十一回猛士」は門弟、久坂玄瑞の書と伝えられている。

松陰は自らの性急さが招いた災難で囚われの身となり、処刑に至る一年半ばかりの僅かな期間、萩の実家へ幽閉の身になるが、周囲の温かい気配りで松下村塾を設立し彼の学殖を慕って訪れる弟子達に学識を伝授する機会に恵まれた。それは幽室文稿なる著作集にまとめられているが、実学教育に関する講義の一章があるので、全文を紹介する。佐久間象山や後述の横井小楠との交流の成果とも思える処が諸処に見える。

論学校附作場：

原文：聚人材振国勢、為今日要務、而人材一聚、則国勢不期振而振矣、聚人材莫如随其器而叙用之、然徒聞其名而用之、不当而捨之、適足招人謗而墜国勢、不可不慎也、故余有二策焉、一曰奮学校、二曰起作場、今学校雖設、不至大奮、余謂大令國中、募學問行義可為人師表者、志氣材能可學而造焉者、其他兵農歷算、天文地理、諸種學芸、自挾所長者、不拘貴賤、不問淺深、皆得充學生、學生分科、各學其所學、不縛以繩墨、唯視其成德達材與否、而黜陟之、宗程顥所議尊賢堂置有德者、觀國法置有材者、無此二法、学校為少年講誦場、而不足以聚人材也、胡援所設經義齋所以成德、治事齋所以達材 無此二齋、学校蘇軾所謂黃茅白葦王氏之同也、其於師道學制、並得其宜矣、果能師二賢之意、遷諸今学校、学校其有不奮者乎、礼、天子太子入学齒讓、今以学校為門地資格之場、且学校將待天下人士、何必吾二国、今陪臣足輕二国之民、猶且不得入学焉、其為規模、豈非可嘆之甚乎、讀書之士、率多空疎、齋稷下可鑑也、故余謂不若起作場連接之学校也、船匠銅工製藥治革之工、凡有寸技尺能者、要皆宜属治事齋、今湊聚諸作場、合衆知、廣巧思、講究船艦器械、必有所成矣、今非無寸技尺能、然樸漱絲粟、不能自奮、或有良工師、其徒不衆、無以成事矣、今學生已不問貴賤淺深、得入学焉、若乃呆然誦讀、無甚補于事、余謂以時驅之工作、顧亦一益也、今世學生固已空疎、不解事務、工匠愚朴、不知要需、二者分為鴻溝、忽聞余学校作場之說、必愕以為異矣、然吾固謂募材能充學生、學生非向空疎徒矣、且作場非必有大作于其中也、工作有學、吾師象山曰、學必有事、非徒誦空文玩空理而已、如學書學劍、可以見矣、故其砲術、自称曰砲學、亦抑空文空理、熟諸實事之微意也、所謂工作之學、亦是物也、連之學生、是為兩便焉耳、嗚呼、今日之務、在聚人材、人材已衆、置之学校作場、然後科其實材實能、隨宜叙用之、有諫官焉、有治臣焉、軍防備矣、民政舉矣、一器一芸、具得其妙矣、如是而国勢不振者、未之有者、

私訳：吉田松陰の上記「論学校附作場」を以下、筆者流に現代風に翻訳、解釈してみた。

「人材を集め国勢を振興するは今日の要務である。然し人材を集中しても国勢の状況に依り其の成否は判らない。人を得る事は難しく採、不採は其の器量、世間的評価などに依りて行うべきである。数合わせの如き方法では世間の批判を招き国運は失墜するので慎重にせねば成らない。其処で私に一策が在る。第一に学校を起し第二は其処へ工場を作る事である。今日学校を建てるに当たりては一大決心を要し、国中に大号令を掛けねばならない。即ち人格に優れる学識のある師匠と成るべき人を募り、志気が高く学ぶ能力がある人材を集める。そして次の様な諸般の人材を育てる；兵、農、歴、算、天文、地理、諸種学芸などなど。自称長者、貴賤に関わらず、知恵の浅深を問わず、皆学生に成り得る。学生は分科させ、それぞれの所属の学問をさせる。あまり固定した枠を作らず、自由に学ばせ、其の結果の成績に注目し、成果無き者は退けるものとする。

朱子学の祖、宋程（そてい）の故事に倣い有徳者を集めた顥所（こう所：公明正大なる評議場）を設け（学生、教師の活動等の）尊賢を論議する。又、有能の達人材を配し国家社会の活動を常に評価する為の組織を整える（研究所の如きか）。此の二つの方法・手段を鋭意整備しなければ学校は少年の単な

る補習の場と化し、人材募集の努力が生きて来ない。「論語説」の著者、胡援（こえん）の設けた学術資料を備えた齋所（図書館の如き）を設け徳性を磨き、又、学校・工場等の実務事業を管理し治める齋所（事務工務部門の如き）を設け資材・人材の調達を行う。此の二つの齋所を設けないと学校は唐代の蘇軾（そしよく：「赤壁譜」の作者）の言うごとく、学校は田舎の草深い陋屋に成るであろう、王陽明も同じ事を言っていた。学校での師は学問と生産事業の制度を組織し指導する。其の双方を宜しく修業し、業を果たし得た師は二つの道を極めた賢者である。以前学問をするには諸国の賢人を遍歴したが今後は学校で修行する事ができる。学校には能力も低く活力のない人も居よう、礼を失っては成らないが、天子や身分の高い人も年齢順に入学すべきである。学校は今後、従来の門地などに替わる人間の能力資格を与える場と成ろう。

且つ学校は普く天下の人士を受け入れる場に成るべきである。何故我が国では学校が上下二つに分かれているのか。目下の処、陪臣達と下級の足輕は第二の国民を為す如くに分かれている（萩の明倫館が士分みの学問の場に成っている事を批判している）。依然として差別が行われているではないか、足輕身分に入学を拒む理由は、其の規模にありと言う（狭いから受け入れない？）、嘆かざるを得ない。読書の士、学者は概ね空疎で偏っている。中国の春秋戦国期の齋と秦の戦いを想起せよ、齋では稷（そく：都市の名）城下に学者を集住させ文芸を盛んにしたが、実学ではなかった為に国家存亡の時の役には立たなかったではないか。其れは私が主張する様に工場を伴った学校を起こさなかったからに他ならないのである。船匠、銅工（金属加工）、薬治（医学、薬学）、革之工（皮革工業）等、全ての技術・技能者を学校工場へ所属させ、一方港では諸々の工業を設け、衆知を集めて廣く思考をめぐらせて艦船や器械を考究させれば必ず成功に至ろう。今、技術・技能を僅かに有すると言う者も居ろうが、お粗末なもので自ら発奮するには至らないし、工芸職人も居るが衆の力には成らず、成功はおぼつかない。学生的身分出自は問はない、全て入学させよう。もしぼんやりと勉強する様な者が居れば補習に大変手間取るから、工場へ誘う事にしている。そして事実を通して考えさせるのも有益である。

学生は基より空疎なものであり、世の事務的な業務には疎く、一方工務作業者は愚かで朴訥として居り世間の経済を知らない。此の為学問をする人と現場の人々は極めてその立場が分離している。其処で私の生産的学校の説を聞くや否や、驚き且つ考え方を異にし反論するに至るのである。其処で私は能力のある人材を集め、学生にしようとするのである。工場を伴った学校では学生は空疎な人間には成らない。生産の工場では必ずしも大作を作るには及ばないのである。物を生産する工作の場は学問の場そのものでもある。我が師象山も同様なことを言っていた。そして学問は同じく事実の裏付けを持たねばならぬ、とも言っている。彼は私と同じく空理空論の人ではない。剣を学ぶ様に学問を学ぶべきであり、実物・事実を見なければいけない。彼の砲術は彼自ら砲学であると言っていた。空理空論を省いて諸々の実際の事柄に熟達することは微妙な真理の真髄に通じるのである。いわゆる工作の学問も其れと全く同じである。学生諸君！先ず両便をして（大便と小便の意）身を淨くして集中して聞きなさい。今日大切な事柄は人材を集める事でありませう。此処には既に人材は居ると言えませう。工場を学校内に設置しなさい。しかる後専門の科に適材に分かれ、実際の能力を鍛えなさい。此処の卒業生を任用して宰判官、政治家、吏員、軍人を育て防備を成し、民政の振興を図るべきであります。各人一芸に依って其の技量を生かすべきであります。もしそれでも国勢が振るはないとすれば、其れは人物が一人前の達人の域に成っていないからであります。」……中括弧（ ）内は筆者の注記。

此の論文は1858（安政5）年の3月から10月の期間に執筆されたと思われる。この数ヶ月の間に、松

陰の弟子正木退蔵が村塾で学んでいた。正木家は萩藩では大身であったが、13歳の時に村塾へ入学していたのである。後に正木退蔵が東京職工学校（現、東京工業大学）初代校長に就任した際、正木自身が漢学の教授を買って出たことなど松陰流の実学教育は日本の工業教育の礎と成ったことは間違いない。

YOSIDA-TORAJIRO (by Robert Louis Stevenson, 1850~1984)

スティーブソンは小説宝島とかジキル博士とハイド氏の作者として日本人に知られている。彼の作品中に吉田松陰を叙述したものがある。スティーブソンは英国滞在中の正木退蔵から吉田松陰の事績を聞き、それに感動して本作品ができた。以下括弧内は翻訳作品からの引用である⁸⁾。

『……吉田は中国文学、つまり古典をよく知り、父祖から受継いだ学問である築城学にも秀でていた。築城学は彼の得意とする処であり、なお幼少の頃より詩人でもあった。彼はまた精気旺盛な知的な愛国心の持ち主でもあった…』。

作品の粗筋内容は、松陰が江戸から全国へ巡歴し諸地域の実情を調べ諸学者と交わり、徳川幕府の悪政を打破し西欧諸国の侵略を阻止するには、先ず外国の状況を知る為に渡航する必要がある事を悟る。全ては正木が語る記憶をスティーブソンが書き留めたものであるが、松陰をはじめとする身命を投げ出して國と同胞を救おうとする殉教的な多数の若者達への惜しみない愛情に満ちた記述となっている。そこで正木が見た松陰先生と塾の有様が生き生きとして描写されている。

『…彼の容貌は醜く、その上に天然痘の痕があり、あばた顔であった。天は最初から彼に恵みを与えなかった訳であるが、日常の習癖も醜いものであった。衣服はみすばらしく、食後は袖で口を拭い、顔を洗っても袖で拭いた、二ヶ月に一度しか髪を結わず非常に見苦しい様子であった。この様であったので彼は一度も結婚はしなかったと言うことは想像に難くない。口を開けば激烈で、悪口であったが、柔和で誠実な教育者でもあった。授業内容は時々門弟の頭を素通りし、弟子達は口をぽかんと開けているか、げらげら笑っているだけの事もあった。…しかし時が経つに連れて門弟達は次第に吉田の教育主旨を理解するようになり、ついにあの変てこな教師を崇高な人格者として尊敬するに至った。…間もなく吉田は裁きの場に立った。その最後の場面（伝馬町の処刑場）は末期を飾るに相応しいものであった。彼は民衆の面前に立ち、己の思想を説き、それを称え、この國の歴史に残された教訓を指摘し、將軍権力の不正とそれがもたらした罪悪を数えた、この大演説の直後、彼は連れ去られて処刑された。31歳であった。---吉田の計画の主なものほとんど失敗に終わった。しかし彼の死後の日本を眺めると、彼は成功を治めたと云わざるを得ないのだ。明治維新のさい、あの最後の革命の時、彼の同志や門弟たちが、その主要なる指導者となったのであり、また、その後も彼等が日本の支配層を形成した。…佐久間となって生きるよりは、吉田となって消滅したほうがよい。薩摩の日下部^{注2)}も言ったではないか。「水晶になって砕け散ったほうがまだ」と。…一言付け加えさせていただきたい。吉田を思い起こすだけでは不十分で、同時に、町人出身の一兵士のことを、日下部のことを、そしてこのように勇敢な男たちと同時代に生きたことは、わくわくするような喜びである。宇宙的な尺度からいえば、ほんの数マイルしか離れていないところで、私が物憂く勉強している時、吉田は蚊の針で目を覚まし、己を責め苛んでいたのであり、諸君が一ペニーの所得税に不満を漏らしている時に、かの日下部は崇高な詩を口ずさみつつ死への道を歩んでいたのである。』

注2) 文脈から、薩摩藩士日下部祐之進である。松陰の『留魂録』に見える日下部伊三次は祐之進の父、父子とも安政の大獄で捕縛、父は1858（安政5）年に獄死、長男祐之進は 1860（万延元）年3月3日に刑死、3月

3日は桜田門外の変の日。墓は千住回向院にある。

3. 横井小楠の提唱した実学教育^{9, 10, 11, 12, 13, 14)}

横井小楠は肥後熊本藩士で、小楠の父横井大平時直の次男として1809（文化6）年に生まれた。父は穿鑿^{せんさく}所目付を勤めた中級の役人の家柄で、大平は郡代、奉行副役、鉄砲組頭、二之丸屋形作事係、などを歴任した有能な役人であった。小楠の名は時存^{ときあり}、通称は平四郎、号は小楠の外に「異斎」、「沼山」などがあるが、小楠で通っている。幼少から才気があり、藩学時習館へ入学し、23歳のとき一般課程に在学し、25歳では時習館の居寮生（専門課程）となる、成績は抜群であった。全国各藩ともに武家子弟の教養を高める藩学があった。時習館は1754（宝暦4）年に細川重賢により設立された。中小藩士の場合、其処での成績が昇進にひびいたらしい。藩士の場合7～8歳で入学、句読齋や習書齋で句読師・習書師について読書を習う。その後蒙養齋^{もうよう}では中級の学科を修め、12～13歳で進級する、此処で好成績だと講堂転昇となり高等な課程を学び、17歳くらいで更に転昇する。在学の期間は取り決めがなかったようで、家の事情によった。講堂で数年を過ごした後、当人が希望すれば居寮の菁莪齋に入り寄宿して勉学する居寮生となった。1835（天保6）年の例では教授1名、以下助教2名、訓導10名、蒙養師1名、句読師10名、習書師4名。初代教授（18世紀）は徂徠流朱子学の秋山玉山、二代目は朱子学の藪孤山、三代目は孤山の弟子高木紫溟、四代目が小楠の時代で辛島塩井、その次が1841（天保12）年に五代目教授で近藤淡泉。小楠に言わせれば「高木以下は小粒」ということになっていた。

幕府は儒学を御用哲学として全国統治に採用するのだが、それは「士農工商」の上層である「士」が世の中を統治するための哲学にしようとしたのである。然し、元来朱子学の「士農工商」の「士」は侍ではなく、「士大夫」…知識と有徳な人の意味であり、朱子学概念の意味のすり替えが行われていたことが問題である。朱子学は古代農業的世界での理想社会を建てる根本哲学で、有徳な人士が広く庶民を含めた万民が幸せになる平和を追求した社会での人間の振るまいを表現した学問であったと言える。それを幕府の武士階級「士」が武力を背景に住民を支配する学問としようとした処に問題が生じた。「士」すなわち侍が特権階級として農工商の上に君臨し、世の富を独占的に支配することで社会の安定を達しようとした。初期の武家政権では仕方がない事情はあったが、それが固着して継続した事が矛盾を増大させたのである。後世になり社会の生産力が高まり、商業経済が進展し、贅沢な風潮が行き渡ると、それは人間の本性ではあるが、それを権力で抑え付ける政策に出たことが経済運営を行き詰まらせ、貨幣が一カ所、富民階級に滞留する状態を招いて社会不安が醸成された。その矛盾を突かれると権力で弾圧して不平分子を圧殺しようとした寛政、天保の改革などはその好例だが、その底流する問題を朱子学の原点に立ち返って徹底的に究明した哲人が横井小楠であった。

朱子学は鎌倉時代初期に宗の朱熹の学説が伝わり、室町期には五山の僧侶によって並習された。戦国期には薩摩・土佐・京都に朱子学が興り防長・肥後に伝わった。京都では藤原惺窩が林羅山、堀杏庵らの門下を育て、林羅山は幕府の儒官となった。結果、封建支配の思想的支柱となり、水戸学派などの封建的イデオロギーとして政治学者としての朱子学の儒官が寄与した。

江戸中期には昌平黌を中心とする林羅山の系統の家学に対して多数の朱子学者が活発になる。江戸末期には家学化した儒学者は形骸化して新時代に対応できなくなった。そこで小楠たち若手は老人化した教授たちを「小粒」と批判するようになるのである。

因みに癸丑^{きちゅう}の歳、ペリーが来航して日本中がどんでん返しの騒ぎになった1853（嘉永6）年は小楠44歳、松陰23歳。小楠は朱子学者として完成していたが、若き天才松陰は儒学者としては未だ駆けだしで

あった。小楠の所属していた時習館には旧守的な学校派と革新的な小楠の属する実学派が誕生する。天保年間の幕末期の混乱に対処する藩主脳は学校派の旧守層で占められていた。其れを批判する実学派の小楠たちは少数派であったが激しい論戦があった様子である。元来朱子学は中国古代の堯舜三代の理想的時代を学説にまとめた孔子の学を更に集大成した宋代の儒学者朱熹の学説でいわゆる四書五経、四書は大学・中庸・論語・孟子と成っているが、簡単に言えば政治の学であり、「大学」のはじめには治者たるべき教養が示され、其れを己から修めねば成らず、その結果として人を治めることができるという、人間社会の真実の教えなのであった。朱子学は“真実の学問”すなわち「実学」なのである。その内容は現実の政治経済社会の真実を語り、真実を人々の為に実践する学問であらねば成らないとした。小楠たちが語る儒学、即ち朱子学は「実学」でなくてはならず、その為には君主自ら朱子学を実践しなければ成らないとして藩主層を批判した。従って肥後熊本藩では当初実学派は圧迫されたのである。指導方針は教室での文字を数える学問ではなく、教室の場と政治の場を直結し、藩主や藩の重役たちを含めて朱子学、統治の学を講学し討論の場の中で政治を進めようとする実学融合の教育方針であった（今日の国会討論の如き按配である、隠蔽癖は止めろと言う事）。この激的な教育方針は熊本藩では不評で、小楠自身は天才的なひらめきがあったが、個人的には奇癖があり、酒乱気味なところが有って、熊本では悉く弾圧され、実学党は熊本では不人気であった。一方棄てる神あれば拾う神ありで、小楠の実学に対する評判は藩外で高まった。

越前国福井藩の松平春嶽（1828～1890）が小楠の学識に惚れ込んだ。松平春嶽は幕末の英明な君主で徳川御三家の一家、田安家の出身。小楠は藩主のご意見番として1858（安政5）年に春嶽に招聘され、福井藩の教育指導と財政再建指導を行った。彼の主張する実学を此処で実践したのである。藩主の絶大な支持があつて福井藩は財政再建に成功する。紆余曲折の中で春嶽氏たちは幕末の行政改革に取り組むことになるが、この渦中で小楠は一時期福井藩から離れることになる。そもそも小楠の酒癖に起因したものであった。維新後再び中央政界の呼び戻されて参事職に返り咲くが、体調を崩して大した働きもできない内に1869（明治2）年、遅れてきた暗殺団の手で葬られてしまった。

『国是三論』

福井藩に招聘されて藩財政再建と教育指導に従事している間に著述された小楠の主著である。内容の一是富国、一は強兵、一は士道でそれぞれ順位はない。そして「堯舜精一の心術を磨き、いささかも私心のこれなきところの修業が第一」としている。富国については藩札を増札し、藩外交易に努めた。藩主導の交易所を設け商人の中から信頼のできる人達に運営を任せ、役人は最小一人だけ付けて殆ど民営とし、商品を藩内から集荷して藩外へ売り捌き金銀貨幣を集めた。それを元手に更に藩札を増発して殖産興業を進めたのである。この藩の利益の大半は藩内の民間事業へ還元し、民富に努めたので自ずと藩財政も潤うように成った。此の富国論はアダムスミス流に近い哲学を持っていた、福井藩指導者橋本左内の思想を拡張していたが、残念なことに橋本は安政の大獄で処刑された。小楠の理論を実践した人物が優れていた。三岡八郎という若い藩士で小楠の講学に心服し、それを実践したのである。後に三岡は由利公正と名乗り明治政府の財政担当をする事になる。強兵についての内容は海軍力の構築であった。幕末の頃はヨーロッパ勢力がアジアを侵略し、中国ばかりか東南アジア諸国は軒並み植民地にされ搾取が始まっていた。この情報は安政元年に出版された『海国図志』（米人ブリッジメン著、中国の魏源訳をさらに幕府の翻訳者が和文に訳出したもの）などを介して小楠の耳にも入って来ていた。兎も角外国の侵略から國を護り、民政の自由なる自決を護る為には軍事力、しかも西欧流の近代兵器で装備された

海軍を持たねばならないと覚悟を決めていた。1855（安政2）年に幕府は勝海舟らの建言によりオランダの協力で、長崎に軍艦修理を目的に製鉄所と海軍伝習所を設けた。勝海舟からの海外情報は小楠にも伝わっており、それが此の論文に結実したのであろう。土道論は国是三論の中で最も長文であり、複雑性があるが、最も基本的な問題を提起している。それは朱子学の原理を政治担当者と共に論じながら実践しようと言う提案で、正に実学融合を目指していた。元来、朱子学は古代中国の農業的理想国家の中で行政担当者が仁政を施くための教養として立ち立てられた哲学で、民政の礎の学問であった。忠君愛国のような幕府御用学ではなかった。小楠の主張もそこに有った。朱子学の理想的王道政治、仁政によって西洋の侵略的覇道を論破して西洋哲学を東洋哲学で圧倒できると小楠は信じていた模様である。処が福井藩で実践している間に朱子学では理解できない事情も生じて来た様子で、情報を総合してみると、どうも米国や西欧社会の政体の方が朱子学の言う堯舜三代の社会に近いのではないかと、さすれば中国や日本は逆に王道どころか無道の國で、欧米の方が有道の國に見える疑問が生じてきた。小楠の子息を幕末にアメリカへ留学させる機会があって、いろいろ情報を知る内にアメリカでも権力が增大すると金権に溺れて無道になる状況を知るに及び、問題は王道・無道の差だけではない事に気付く。それでも小楠は終生朱子学こそ為政者が心がける王道有道の学問であることは疑わなかった。

4. 考 察

幕末維新期の革命期に、局地戦まがいのゲリラ的作戦指導をしたのは吉田松陰であった。彼は一斥候士として前線を視察し、情報を集め、戦術指導をした軍略的兵学者であった。しかし彼の戦術はことごとく失敗する、反面、人間指導者としては、ほんの一年有半の短い期間であったが松下村塾に集まった70人近い門弟を育て、幕末維新の原動力を育て上げた。現実には生前に実現できなかったが人間教育の場として工場を併設した学校の具体的形を提案している。若くして藩校明倫館の軍学師範となったが、階級差別的生徒募集方針に疑問を感じていた。時期は幕末の改革期であり藩内に進歩的正論派と旧守的俗論派の対立があった。正論、俗論の区別は松陰達正論派からみたもので保守的支配層の藩上層部と富裕な商人・地主層は松陰達を危険思想として敬遠していた。松陰は何故この人間差別的教育が行われなくてはならないか、と言うことにかねがね疑問を持っていたことは確かである。農民・手工業職人が底辺層に押しやられているのは無知の故であり、その教育の必要性を痛感し、また上級富裕層が底辺層を差別するのは、現場体験を持たない故であると見なしていたふしがある。この辺は佐久間象山に師事した事柄からも理解できる。砲術は立派な学問なのだ、と言う言葉には現場の人達への思い遣りと同時に現場を理解しない人達への批判が込められている。言い換えれば、現場の経験こそは真の学問なのだ、学問は現実の労働を通じてこそ本物になるということを実感していると言える。それが彼の座右の言葉に凝縮していた（写真1の説明を参照）。

小楠と松陰の交流に際しては詳しい事が伝わっていないが、世間の事柄、事実にして学ばねば本物の人物はできない、と言う点では一致したであろう。小楠の主張は主に政治学の実践に重きがかったが、そこでも実学融合が語られていた。横井小楠の「学校問答」は福井藩に招聘されてから纏まったものだが、日本で人間性・人格陶冶に実学を始めに主張したのは、象山・松陰・小楠達であったと思える。中国では、小楠の所説によると朱熹の時代にも同様な思想があったと見られている。現場実務から離れると人間陶冶は衰退して行くのだと言う。小楠の言う実学は朱子学そのものだった。今日まで朱子学は儒教の原理を示す古典的な訓古の学であると考えている方々が大半で有ろう、それは俗論的な儒学なのであり、朱子学ではなかった。

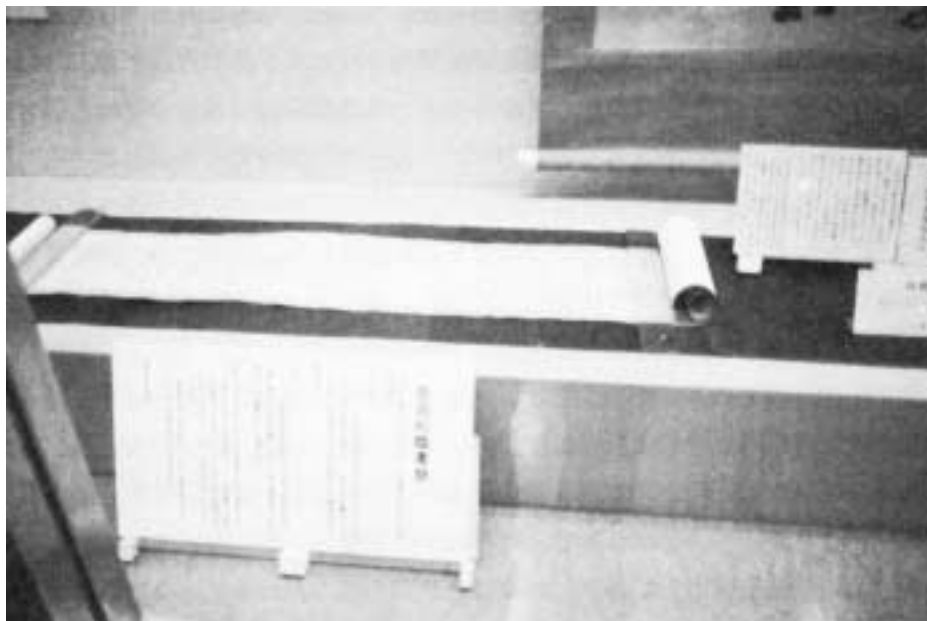


写真2 熊本市沼山津にある四時軒の小楠記念館に展示される松陰からの信書



写真3 熊本市小楠公園にある横井小楠の記念像

明治初期には文部省と東京大学が水道橋北詰にある昌平黌と同居していたが、それは小楠の言う実学融合を形の上では実現しているようだが、儒学者と神学者が権力争いでいがみ合い、收拾がつかなくなり、遂に東京大学が一時廃校になった経緯がある。その時、松陰の弟子であった木戸孝允は老儒は最早不要だとして、儒学を棄てて欧米流の学制改革に邁進した経緯があった。小楠が生きていたら大論争になったであろう、議論が本筋を外れて居るからである。老儒には確かに労害があった、大半の老儒は小楠に言わせれば全く実学でもなければ朱子学でもない権力の座に座って自己の私心と保身に汲々とするだけの俗人であったからである。俗人が学問の場を混乱に陥れたのであった。学問と議論の場は近接

してもよろしいが混在しては弊害も大きいのである。

徳川幕府の祖、家康が日光東照宮に祭られているが、孔子廟のように人徳の尊さで聖人として祭られているか否かは疑わしい。陽明門の脇に三猿の彫り物があり、見まい聞まい話すまいと言う行動原理の訓告を象徴している。此は幕府役人、士の日常心得を表していると言える。当時から「百姓は生かさず殺さず、知らずべからず頼らせるべし」と言う統治原則があったが、それは今日でも日本の役人の行動原理として生きている、現下の役人の守秘義務がそれである。これは極めて広汎な行動を束縛する原理として執務者の言動を金縛りしている。これこそ士分の勤めは民衆から隔絶されて徳川の、そして日本の役人が天下を私有して民衆を人間として扱わない性格を表していると言える。小楠流に言っても明らかに日本の士道は王道に成りえないことを証明している。小楠が日光東照宮を参詣したか否かは分からないが、はたして何と言っただろうか（この思想も人間教育、実学融合の妨げの一つになっているのだ）。

小楠は王道を実現せずに逝ってしまったが、王道である朱子学は西欧哲学を克服できると考えていたらしい。然し同時に理解できない謎も観じていたふしがある。ヨーロッパ勢の中国侵略を前にして、小楠は無道の國が覇権をもって侵入することは人間性に対して許し難い行為であり、中国や日本の儒教思想こそ仁政に基づく王道であると考えていた時期がある。しかし良く観察すると幕府末期の日本の政治状況は正に士道が廃れ王道から外れていたではないか。朱子学でそれを王道に戻すべく実学を提唱し、福井藩を改革して、それを日本全国へ及ぼそうと考えていた。春嶽氏を軸に幕府を内部から改革しようとした努力もあったが、その前に幕府が薩摩長州連合軍により倒されてしまった。そして明治維新を迎えた。その後の社会に対して小楠は充分に関与できなかったのは残念と言うしかない。

今日の政治経済的混乱をみると、到底、日本の現状は小楠の言う王道・有道の國には成っていない、勿論欧米諸國も王道の國ではない。然しそれでは世界の人民は幸せには成れない。何故に覇権國家が世界を牛耳り、無道の社会が生まれてきたのか。その根源を論じたいが、別稿に譲ることにしたい。言えることは幕末期、小楠が観じた王道ではない覇権國が何故近代的な文明の創出に成功し、有道であるべき東洋では近代文明が発達しなかったのかと言う疑問である。小楠流に言えば東洋社会も無道社会であると言うべきなのではあるまいか。西欧社会が文芸復興期以来の自由貿易政策と其れを支える技術革新を軸にした大航海時代と引き続く産業革命があり、その中で強大な経済力を持つ大企業とその國家が資本の蓄積に成功したのである。その特権を許した近代絶対主義政權が生み出した文明が出現したと言うことである。それ自体が覇道的行動であり、資本主義的な政權の指導理念である富国論の中には王道から外れる無道の要因が秘められていたのである。其処までは小楠の生存中には見通すことができなかったのだと言えよう。小楠の富国論も國の内側には王道でも外側には無道押し出す要素が残るのである。

第二次大戦敗戦後、1945（昭和20）年8月、我が國には連合軍が進駐してきた。丁度、現下のイラクへ米國とその同盟軍が占領軍として進駐している状況に近い。日本の場合にはイラクの場合のようなゲリラ的抵抗はしなかった。大人しく牙を抜かれた獣のように民主化が施行された。日本には天皇制が生きていたし、天皇の人間宣言が大きな契機であった。イスラム教の如き強烈な思想は日本の宗教界には存在しなかった。日本人の日常生活が既に宗教離れをしていたのである、明治以来の教育がそうさせたと言える。そして今日21世紀、平和の世になって再び日本は経済的に欧米、ことに米國の支配に屈している。なるほど全体的経済力では世界第二位の経済大国と言われているが、それは政官財閥の上層社会内での成功で、国内の民政は二重構造分化し、底辺層には暗澹たる希望のない日々が待っている。この経済運営の失政はやはり文明的な敗北と見なければならぬ。矢張り東洋思想が欧米の思想に破れたの

だと見えないこともない。又、欧米諸国を見回しても経済的に虐げられた底辺層の存在は確かで、目下何処を見回しても王道仁政をしいている國は地球上には存在しない。そこで地球上に王道楽土を出現させるには新たなる哲学・宗教が求められていると言って過言ではないだろう。そして真の伝統社会、また実学融合も王道社会でのみ実現されるものかも知れない。

5. まとめ

なぜ日本では人間性を豊にする実業教育が本物にならないのか？学校を卒業しても直ぐには本物の一人前に稼げる実業人も技術者も生まれぬのは何故か？という謎を追究する学問的旅路の過程で日本の実業教育のルーツに松蔭がいる事に気付き、そして小楠へと探索の旅は続いた。しかし其処でも旅は終わらない。そうこうしている内に大切な実業世界を支えていた伝統的な職人世界が崩壊の危機に見舞われている事に気付いた。一世紀も前にヘンリー・ダイアーが彼の著作¹⁵⁾の中でそれを指摘していたことを知る方も多いただろう。伝統的日本の文化はゆっくりと時間の流れる農業的文化の中で育まれた。今日のごとき騒々しい単調な南国的リズムに乗って、裸形に近い男女が忙しげに踊りまくり、自動車が唸りを上げて走り回る都会的社会には、安寧な生活と文化は復活しないのかも知れない。そう思いながら人道モラルの高かった真の伝統文化と暮らしを取り戻す為には、矢張り本物の人間教育、実業教育は不可欠だと言う思いが此の研究を継続させたと言える。未だ伝統文化を復活させる鍵は見いだせていない。伝統文化の中の伝統的暮らしこそは王道楽土へ近づく道と思える。それは決して物質が豊富ではあるが雑音と塵の山の公害文化の國ではあり得ないのだ。楽土を求め豊かさだけを追求する文明には何か欠陥がある。従い伝統文化復活へかけての旅の途次から、探求の報文をまとめたのである。

文 献

- 1) 山口県教育会：吉田松陰全集（全10巻）、岩波書店、(1935)
- 2) 海原徹：松下村塾の人々、ミネルバ書房、(1993)
- 3) 沼倉満帆：大村益次郎と正木退蔵：山口県地方史研究第16号、(1986)
- 4) 文部省編：教育雑誌、83号、明治11年（1878）
- 5) 東京工業大学編：東京工業大学百年史、(1985)
- 6) 奈良本辰也：吉田松陰、岩波書店、(1951)
- 7) 玖村敏雄：吉田松陰の思想と教育、昭和17年（1942）
- 8) R.L.Stevenson、島幸子訳：YOSIDA-TORAJIRO、条例出版（株）、(1976,9)
- 9) 三上一夫：横井小楠-その思想と行動-、吉川弘文館、(1999)
- 10) 松浦玲：横井小楠-儒学的正義とはなにか-、朝日新聞社選書645、(2000,2)
- 11) 童門冬二：横井小楠と由利公正の新民富論、(株)経済界、(2000,9)
- 12) 栗谷川虹：白墓の声-横井小楠暗殺事件の深層-、新人物往来社、(2000,1)
- 13) 金谷 治訳注：大学・中庸、岩波文庫、(1998)
- 14) 小島 毅：朱子学と陽明学、(財)放送大学教育振興会、(2004,3)
- 15) ヘンリー・ダイアー（Henry Dyer）著、平野勇夫訳：大日本、実業之日本社、(1999)

本誌は当大学校教職員の主著又は共著（学外者含む）による職業能力開発に関する総合的研究論文誌です。

掲載する論文のカテゴリーは

- ① **論文**：特定の主題に関する研究の成果を体系的に論述したもので、仮説の検証、理論の定立、その他独自の価値を主張しうる内容をふくむもの。
- ② **研究ノート**：調査の実施、先行研究の整理等の結果、新たな仮説或いは研究の方法論を提示したものだなど一つの体系的な研究の一部であるが、それ自体として一応完結し、引続き行われる研究の方向づけを与えるもの。
- ③ **資料**：他所にないデータを整理、分析したもので、これを公にすることが研究及び職業能力開発関係者にとって有益と考えられるもの。
- ④ **紹介又は解説**：内外の職業能力開発界の動向、文献、その他注目すべき情報を体系的に説明したもの。

の4部門です。

「職業能力開発研究」編集専門部会

部会長 今村 耿介
委員 郡山 力郎、桂 賢一、木村 亨、木山 正博、
鳥潟 与明、白川幸太郎、辻 栄一、藤井 信之、
菅野 恒雄

職業能力開発研究 第23巻

発行 2005年3月
編集・発行人 職業能力開発総合大学校能力開発研究センター
所長 池本 喬三
〒229-1196 神奈川県相模原市橋本台4-1-1
TEL 042-763-9046（普及促進室）
印刷 システム印刷株式会社

※無断複製を禁ず。



古紙配合率100%再生紙を使用しています
石油系溶剤を含まないインキを使用しています

HUMAN RESOURCES DEVELOPMENT RESEARCH

VOL. 23

2005

TEATISE

The training effect in advanced vocational training

..... Manabu MATSUZAKI, Makoto KIKUCHI

Training Materials to Assist Students Studying Information
Technology by a Web/XML system

..... Hirofumi FUKURA

The contradictory issues between the intellectual law
and the antimonopoly law

..... Hiroyuki SAKURAI

A trial of the application of PPM method to Training evaluation 2

..... Goro ARAI, Sakae SUNADA

Practical Education Realized by Yoshida-Shōin and Yokoi-Shōnan

..... Tokio OKAWA, Ichiro TUTUMI

**THE INSTITUTE OF RESEARCH AND DEVELOPMENT
POLYTECHNIC UNIVERSITY**

4-1-1, Hashimotodai, Sagamihara, Kanagawa, Japan.